

部落襲撃に関する新史料「岡山県暴動一件」

上 杉 聰

明治四年八月に、いわゆる「解放令」が公布されて以降、全国に数多くの反対一揆が勃発したことは、よく知られている。ただ、農民一揆がなぜ「穢多はこれ迄通りの事」などの要求を掲げて立ち上がったのか、あるいは、直接的に激しい部落襲撃を实行したのか、などの問題は、決して十分に解明されている訳ではない。

ここに紹介する史料は、右の「解放令」反対一揆の一つとしてあげられる、岡山県中部地域に発生した部落襲撃事件に関する新史料である。

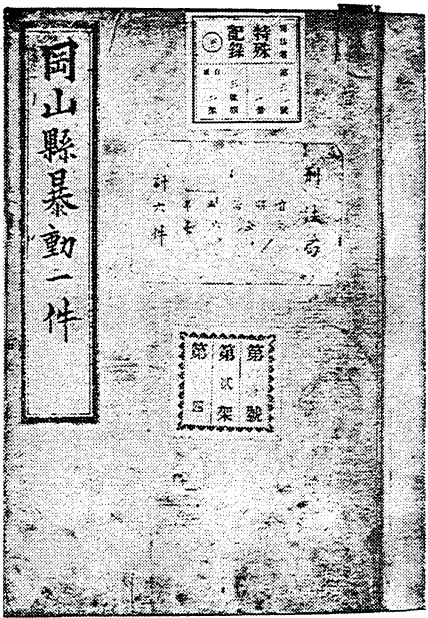
この騒動は、明治五年一月一四日、現在の上房郡北房町から起り、同郡有漢町より御津郡(当時津高郡)加茂川町へ拡大、同郡建部町で同月二〇日に終息するまで、計七日間にわたって繰り広げられ、部落民三名を鉄砲・竹槍等で虐殺し、約五〇軒を破壊・焼亡させている。参加者は、四、〇〇〇名を越える(「伝聞記録」)と推定される。

この騒動の特徴のひとつは、「解放令」以後、自覚的行動を開始した被差別部落に対して、一般村民が、もと穢多頭などと呼び寄せ、その内の一人を集団で取り囲み、殺害し、更に木砲(大砲)・小銃・竹槍などで武装して居住地を襲い、山手に逃れた人々を、草木に火を放って追い出し、二名を虐殺したなど、残酷さをむき出しにしていることである。その点では、翌明治六年五月に、同じく岡山県の美作地方で起った。通称「美作血税一揆」の残虐さ(一八名を殺害)と共通の性格を持っている。

ただ、この騒動は、美作の一揆と較べて小規模であるため、重視されにくい。しかし、次の様な意味で、充分注目されてしかるべき、重大な歴史的事件なのである。すなわち、他の「解放令」反対一揆のように、多くの要求の一つとして部落解放反対が含まれている場合と異なり、この事件は、単独でそのことが要求され、行動に移されている。そのために、「解放令」反対一揆中の最も極限的な例として、その要素だけ単独で抽出し、分析することが

できるからである。その他の一揆は、この騒動から引き出された結論的要素を薄めたり、それぞれの一揆が持つ独自の諸要因を複合させて、全体像を再構成することができよう。

ところが、この騒動について、これまで、あまり多くの史料が確認されている訳ではない。内閣文庫の『岡山県史料』（「県治紀事」「小田県史」などを含む）や、『三重県史料』（当該地に三重県の飛地があった）中の記録に加えて、長光徳和氏の編集になる『備前・備中・美作、百姓一揆史料』第五巻に、「伝聞記録」が新しく紹介されている程度である。ここに紹介する史料は、右の空白を、少なからず埋めるものとなるよう。



「岡山県暴動一件」は、国立国会図書館支部法務図書館の所蔵になるものであり、この冊子中には、合計六つの事件が収録されている。写真版にあるように、表紙には「司法省特殊記録」「刑法局自明治五年至同六年計六件」などと記入されている。収録中最後の一件が、右に述べた騒動の記録であり、ここにその全文を紹介する。

この史料が明らかにする範囲は、右騒動全体の最終局面にあたり、津高郡（現御津郡）中田村を、近村一六・七箇村で襲撃し、四一箇所を焼亡させたなどの事件に関するものである。構成は、罪に問われた者、および参考として調べられた者の自由調書（口書）が大半を占め、加えて被疑者に対する岡山県の量刑伺い（明治五年九月二四日付）と、それへの司法省からの指令（明治六年一月二二日付）の、三部分から成っている。（なお、綴じられている順序は、右の逆になっている。）更に、紹介にあたり、「目録」として冊子の冒頭に綴じられている部分を、最初に附しておいた。

本史料から結論付けられる内容は、ここでは差控えたいと思うので、若干の重要と思われる点について紹介し、今後の研究の一助として供したい。

○史料中の殆どの部分は、自由調書としての「口書」であり、それゆえ、「一応信憑性を疑ってみるべきではあるが、他史料（特に既述の「伝聞記録」と重なる部分が多い）ともよく符合し、かなり信頼性の高いものと考えられる。

○「口書」は記述様式が一定しており、ために各人の自供が他

と重複する場合が多いが、各所に多様な事実が散在して述べられており、事件の全容を解明する、大きな手がかりになっている。

○騒動の基本的性格として、各「口書」が共通して述べていることは、「新百姓（被差別部落）征伐」であり、そうした呼び方が公然とされていたことを物語っている。

○事件の発端は、被差別部落の人々が、「解放令」以降、「古百姓（一般農民）同様の振舞いにおよび、無礼筋多き者もこれ有り」と見なされたことにあるとする点でも、共通している。ただ、「無礼筋」が具体的にどのような行動を指しているかについては、記述は多くない。しかし、田地子村里正・行森建一郎・同武四郎の「口書」などには、被差別部落の一人が行森宅で「座上へ腰掛け」たため、大きな問題として、一般村民の中で非難されていることが記されている。また、これを許した行家を「絶交」しようとする動きも見られ、注目を要する。

○本史料の、最も重要な点の一つは、部落襲撃をおこなった中心人物達の石高について、洩れなく記載していることである。これによると、全員が一〜五石の範囲に入り、下層農となっていた。その点では、中心的煽動者とみなされた東常五部も例外ではない（三五四斗）。「解放令」反対一揆における部落襲撃を、富裕な農民層の指導によるものとする説は、今一応、再検討を必要とされよう。

○上房郡から現御津郡にかけて、広範な地域を席卷したこの騒動は、いずれも美作地方に隣接して発生していること、激しい部落襲撃がおこなわれたこと、部落から誇状ないし謙讓を誓う「証

書」を取ろうとしていたこと（「東常五郎口書」等）などから見て、明治六年の美作一揆へと連続する性格を濃厚に持つっており、美作血税一揆研究の方面からも検討されるべきであろう。

翻刻にあたっては、なるべく原文書に忠実を期して、読点を加えたこと、漢字は旧字体を新字体に、一部の変体仮名を仮名文字に改める程度にした。また、明らかな誤字には「(マ)」「(ム)」を付し、あるいは正しいと思われる文字や正式な文字を丸括弧の中に記した。「」は異墨を、点線は内表紙を示す。

判読にあたっては、大阪芸術大学・小西愛之助先生の御教示を得た。記して感謝に代えたい。

史料 備前国津高郡中田村襲撃事件につき司法省より処罰を指令 明治六・一・二二 「岡山県暴動一件」

第巻号	岡山県暴動一件目録明治六年	指令
	岡山県向、備前国津高郡田地子村農、田原小四郎外十七名、東常五郎発言ニ同意シ、同郡中田村新百姓ヲ降参セシム可ク申称、多人數ニテ同村居宅乱暴・放火セシニ付、処刑ノ件 明治五年九月廿四日	一月 廿二日

（補外）
「明六」、一月廿二日付 「司法省用箋」

(三輪田) 賊盜律⑤

兇徒衆ヲ聚メ、村市ヲ毀壞・焼亡スルノ首 東 常五郎
斬罪
同上從ニシテ火ヲ放ツ者 大頭鉄五郎
絞罪 竹内 俊三

同上本罪絞之處、捕縛在獄中、他囚糾合シ越獄スルニ從ハ
ス、実ニ掘テ首報シ、因テ他囚逃走スルコトヲ得サレハ、首
報スル者本罪ニ一等ヲ減スルノ例ニ依リ

准流十年 長尾 千七
衆ヲ聚ル造意ヲナスト雖モ、其意兇行ヲ謀ルニ非ス、暴動ハ
常五郎臨時ノ發意ニ出レハ、常五郎ヲ以首トシ、本人ハ從ヲ
以テ論シ

准流十年 田原小四郎
兇徒衆ノ從ニシテ、人ヲ殺シ火ヲ放ツノ事無シト雖モ、暴
横ヲ行ヒ、人ヲ捕縛・殴打スル者 作藤 作吉
徒二年半
同上ノ徒、人家ヲ乱暴スル者

徒二年半 (長尾長五郎
長尾安太郎
同上附和隨行ノ者、違令ノ輕

贖買金二兩一分ツツ

大江 梅吉
行森 貞一

備前國津高郡田地子村百姓田原小四郎外拾八人、吟味仕候処、左
之通

備前國津高郡田地子村百姓

田原小四郎

申五十四才

右田原小四郎義、当壬申正月十九日、同村百姓齋藤勝次郎亡娘か
よ方家普請ニ付、村方之者共出會罷在候場所ニ而、同夕集合之義
相企、所持之小銃携へ、氏宮へ寄集候上、同村百姓東常五郎發
言、同郡中田村新百姓共ヲ惡シシ、降參為致候等与申称へ、押行
候ニ同意致し、同人俱々遂示談、多人數同所ヲ押出候ニ因而、近
郷村之者迄動搖、前書中田村へ罷越、同廿日私憤ヲ以て新百姓
居宅乱暴・放火及候者有之、小四郎義者手ヲ着不申候得共、前条
衆ヲ集候義相企候処より、斯大典ヲ犯し候ニ立至候始末、不届至
極ニ付、絞罪可申付哉

備前國津高郡田地子村百姓

東 常五郎

申四十八才

右東常五郎義、当壬申正月十九日夕、村方一統氏宮江集合致し候
旨承り、所持之小銃携へ、同所へ立越、津高郡中田村新百姓共ヲ
惡シシ、同村へ押行降參為致候様發言致し、村内百姓田原小四郎
等俱々一同之者へ遂示談、先立押出候上、他村之者ヲ劫誘致し、
前書中田村江押懸、同廿日多人數之中、私憤ヲ以て新百姓居宅放
火おひ候者、右之常五郎義者新百姓之居宅へ踏込、諸道具打毀
テ、又者通行之婦女并中田村百姓藤井久蔵江対し、空砲相發し候

東 甚九郎
行森 能吉
大頭 源吉
藤本卯太治
大頭 富吉
西山 久吉

村内多衆会合シ、穩カナラサレハ、里正ノ職尽力鎮圧スヘキ
ノ処、自己ノ便ヲ計テ酒ヲ贈リ、預リノ村印シノ職ヲ貸シ与
フル等、職掌ニ似合ハサルヲ以テ、不応為重キノ処、衆寡ノ
勢事情已ムヲ得サルニ出ルヲ以テ、輕キニ減等シ、答三十
贖罪金二兩一分 行森建一郎

鎮靜説諭手ヲ尽スト雖モ、多衆ノ暴動力ヲ支フル能ハサル者
無罪 谷 武四郎
伺之通 行森武四郎

無罪 (奥) (松本) (丹羽)
書印

(以下すべて岡山県用箋)

備前國津高郡田地子村百姓田原小四郎外拾八人御仕置伺書
岡山 備前國津高郡田地子村百姓
富五郎伴
大頭鉄五郎
申四十二才

始末、不届至極ニ付、絞罪可申付哉

備前國津高郡田地子村百姓

富五郎伴

大頭鉄五郎

申四十二才

右大頭鉄五郎義、当壬申正月十九日夕、村方一同氏宮江集合、津
高郡中田村新百姓ヲ惡シシ、降參可為致候様申立、同村へ押行候趣
承候ニ付、小銃携へ、右人數ニ加リ、先立て他村之者ヲ劫誘し、
又ハ通行之婦女へ対し空砲相發し、多人數中田村へ押懸候上、同
廿日、同村新百姓繁森八十次居宅へ及放火、卒ニ數軒ニ延燒致
し、刺入牢中、備中實陽郡板倉村百姓守屋喜右衛門、大坂信濃橋
通り信濃町紀伊屋屋平三郎、河内國出生豊松、甲州巨摩郡台ヶ原
駅出生岩吉等ニ同意、俱々破牢相企候始末不届至極ニ付、絞罪可
申付哉

本文平三郎・豊松・岩吉共義へ、当七月十日伺濟、斬罪ニ処
申候、喜右衛門義者本罪共ニ別紙ヲ以相伺可申候

備前國津高郡市場村百姓

竹内 俊三

申三十二才

右竹内俊三義、当壬申正月十九日夕、近郷村之者とも多人數、
津高郡中田村新百姓を惡シシ、降參可為致候様申立、俊三之居村
通行之節、右人數ニ相加リ、竹槍携へ俱々中田村へ罷越候上、同
村人家へ立入及乱暴、又者新百姓繁森房吉納屋へ及放火、卒ニ數
軒ニ延燒致し候始末不届至極ニ付、絞罪可申付哉

備前国津高郡西原村百姓

長尾 千七

申三十二才

右長尾千七義、当壬申正月十九日夕、近郷村之者共多人數、津高郡中田村新百姓ヲ悪シシ、降參可為致様申駱立、千七之居村通行之節、右多人數ニ相加里、竹槍携へ俱々中田村へ罷越候上、同村人家へ立入及亂暴、又ハ新百姓川上伊勢吉居宅へ放火および、卒ニ數軒ニ延焼致候始末、不届至極に付、絞罪可申付哉相伺可申之処、入牢中当七月五日、相牢河内国出生豊松、大坂信濃橋通り信濃町紀伊屋平三郎、備中賀陽郡板倉村百姓守屋喜右衛門、甲州巨摩郡台ヶ原駅出生若吉等先立、^(減)破牢相企罷在候を、同晩七ツ時過、千七義訴出候ニ依而、死一等ヲ成し准流十年可申付哉

備前国津高郡校村百姓

佐藤 作吉

申四十四才

右佐藤作吉義、申壬申正月十九日夕、近郷村之者とも駱立、津高郡中田村新百姓共ヲ悪シシ、征伐与称へ、多人數押行、同廿日暴動・放火等ニ及び候得共、作吉義其節交リ罷越不申、一旦引取、尚又同日同様押懸參候節、竹槍携へ多人數ニ加里、同村へ罷越候上、新百姓繁森八十次ヲ縛し候ニ付、同村百姓藤井久威押留候を憤り、同人ヲ打擲致し候始末、不届ニ付、准流十年可申付哉

備前国津高郡西原村百姓榎太郎伴

長尾長五郎

申二十四才

行森 熊吉

申四十四才

大頭 源吉

申三十四才

藤本卯太治

申三十五才

大頭 富吉

申二十一才

西山 久吉

申十五才

右大江梅吉已下七人之者共義、当壬申正月十九日、村内百姓田原小四郎も遂示談、氏宮へ集合、於同所同東常五郎義、津高郡中田村へ押行、新百姓共ヲ降參可為致旨發言致し、集合多人數之者同意之上、同村へ押懸參、新百姓居宅亂暴・放火及候者有之、其節、右之者共も同様罷越候へ共、手ヲ着不申、附和隨從者ニ因り、無罪ニ可有御座哉

備前国津高郡田地子村里正役

行森建一郎

申四十三才

右行森建一郎義、当壬申正月十九日、津高郡下加茂村郷中大仙河原へ、新百姓征伐与称へ、加茂郷村之者共多勢集合罷在候風聞承候ニ付、村内百姓田原小四郎・行森熊吉・大頭源吉共呼寄、居村固メ之義及示談、其後氏宮集合之場へ酒差贈り候ニ付、孰れも給合之上、同郡中田村新百姓共ヲ降參可為致旨申立、同所押出し

右長尾長五郎義、当壬申正月十九日夕、近郷村之者とも、津高郡中田村新百姓ヲ悪シシ、征伐与称へ駱立、押來候ニ付、小銃携へ右多人數ニ加里罷越、同廿日村境四川堤へ村之者共集合中、中田村新百姓居宅へ火ヲ放子候様、多人數俱々呼り候ニ付、同郡市場村百姓竹内俊三義、長五郎所持之火繩取持、中田村新百姓繁森房吉納屋へ放火致し候ニ立至り、其他同村同黒田定次郎宅へ、多人數俱々立入、私憤ヲ以て家財等打毀チ、亂暴相働候始末不届ニ付、准流十年可申付哉

備前国津高郡西原村百姓治太郎伴

長尾安太郎

申三十二才

右長尾安太郎義、当壬申正月十九日夕、近郷村之者共、津高郡中田村新百姓ヲ悪シシ、征伐与称へ駱立、押來候ニ付、齋口携へ、右多人數ニ加里罷越、同廿日同村新百姓黒田定次郎宅へ立入、多人數俱々私憤ヲ以て亂暴相働、其後同村堤へ集合罷在候節、新百姓居宅へ火ヲ放子候様、多人數俱々呼ハリ候処、西原村百姓長尾千七義、中田村新百姓川上伊勢松宅舎江放火致し候ニ立至り候始末、不届ニ付、准流十年可申付哉

備前国津高郡田地子村百姓

大江 梅吉

申四十七才

行森 貞一

申二十九才

東 甚九郎

候節、得指止メ不申、前書中田村へ出張致候上も、鎮撫方不行届之段、不束之事ニ付、如何可申付哉

備前国津高郡校村副戸長

谷 武四郎

申五十七才

右谷武四郎義、里正役在勤中、当壬申正月十八日、津高郡加茂郷村之者共、新百姓征伐与称へ、多人數同郡下加茂村之内字大仙河原へ集合罷在候旨風聞承り、翌十九日晚、外方より掃路、同郡田地子村百姓大頭鉄五郎方へ立寄、前書大仙河原へ多人數集合罷在候旨風聞之儘相咄し、掃路之上判頭之者共呼寄セ、村方取鎮方説諭ニ及置候得共、近郷之者共同郡中田村へ押行候様呼り、駱立候(二)付、同夕村方之者共村端迄押出候節、即刻同所へ罷越、尚説諭、暫時指止メ候得共、終ニ中田村へ押行、多人數ニ相加里候ニ立至り、鎮撫方不行届之段、不念之事ニ付、如何可申付哉

備前国津高郡田地子村百姓

行森武四郎

申三十三才

右行森武四郎義、当壬申正月十九日、津高郡加茂郷村之者共、同郡下加茂村之内字大仙河原へ集合罷在候旨風聞有之ニ付、村方人氣駱立候際ニ当り、村内里正役行森建一郎へ、人口承込候儘相咄候段、無罪ニ可有御座哉
右之通ニ御座候、御仕置之義、別帳口書拾九冊并手續書老冊共相添、此段相伺申候、已上

明治五年壬申九月廿四日

岡山 県

江藤司法卿殿
福岡司法大輔殿

控

備前国津高郡田地子村百姓田原小四郎口書

岡山県

備前国津高郡田地子村百姓

田原小四郎申口
申五十四才

先般同郡中田村新御百姓江対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私義高式石所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処、当正月十九日、村内御百姓齋藤次郎亡娘かよ方家普請ニ付、村方之者共三拾人計手伝ニ参リ、私義も其中ニ相加リ罷在候処、村内里正役行森建一郎方、村方惣代与して両三人参異候様、村内御百姓東基九郎ヲ以て申越候ニ付、私并村内御百姓大頭源吉・行森熊吉共同道、為惣代罷越候処、建一郎申出候ハ、津高郡下加茂村郷中大仙河原へ、新御百姓征伐与称へ、加茂郷村之者多勢集合罷在候風聞有之ニ付、右多人数之者押懸ケ村方通行、若哉踏留り候も難計、右様相成候而者村方入費も不
少、如何取計可然哉、尤為探索過刻々村内御百姓大江梅吉、行森貞一郎等遣し置候ニ付、此段申該置候間、或ハ村内字花

折与申所へ、村方之者前以罷越、通行押留可申哉与申候ニ付、小村之事故、指止メ候義不相叶節ハ附添、同様可參様私先立申答候処、決而先立候義ハ不相成旨建一郎申渡候ニ付、直ニ同家立出、前書かよ方普請場へ罷越し、一統之者ハ右手続申伝置、其儘同家ニ而手伝仕罷在候処、前書大仙河原へ多人数集合ニ就而ハ、近郷人氣騒立、種々之風聞も御座候折柄、同院私發言、村内氏宮江村方限何れも今夕寄合示談仕候而者如何哉与、一同江申該置、私義者其場一統より少し先へ帰宅仕罷在候処、同夕五ツ時頃、追々氏宮ハ村方一統之者寄合候ニ付、私義者威之ため所持之小銃携へ、右場所へ罷越候処、前書建一郎方一同ハ酒差贈、孰も給合之上、村内御百姓東常五郎義發言、同郡中田村新御百姓とも、近頃者古御百姓同等之振舞ニ及ひ、無礼筋多キ者も有之ニ付、同村江押懸參、降參為致候様申出候ニ付、私初メ一統之者酒氣之勢ニ乘し、孰も同意仕、直ニ同所押出シ、同郡富沢村其外隣村等も相騒、遂ニ拾六・七ヶ村之者共、中田村郷中へ集合中、新御百姓共手向致し候節ハ打合可申旨、一同談決仕、翌廿日早天、私村方并同郡桜村之者共ハ、新御百姓之家立有之山手へ廻リ、外村ハ野間方押懸候処、最早新御百姓共ハ散乱致し、武ヶ所ガ誰欺放火仕、新御百姓本家并門・土蔵・納屋共八ヶ所焼失仕、尤私義者其頃同村端ニ罷在候処、御出張御役員鈴木陽次様、一同之者ハ早と引取候様御理解ニ付、村へ孰も引取申候、然ル処、同日八ツ時頃、近郷村と再び動揺、私村方も同様前書中田村へ尚又押懸參、多勢之者新御百姓居

宅乱暴、又者放火仕、本家拾四軒并土蔵・納屋・牛屋共拾壹ヶ所焼失仕、尤私義ハ手ヲ着不申、前同様村端ニ罷在候処、御出張御役員森瀬喜次様方、一同之者早と引取候様厚ク御説諭御座候ニ付、孰も村方へ引取候義ニ御座候

右之通申上候ニ付、被仰問候者、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者共集合罷在候趣相聞候ハ、村方おるても屹与取鎮り可罷在答無其義、其方發言ニ而村方寄合相企候節、小銃携へ罷越、村内御百姓東常五郎發言、津高郡中田村新御百姓ハ押懸可参旨申出候ニ付、俱々先立罷越候処方、外村と動揺、多人数ニ相成、右新御百姓之居宅乱暴放火及候者有之ニ付、上下之役人出張説諭に因而一旦引取、尚再発之節も罷越候其方ニ付、俱々手ヲ着、暴動・放火致し候義成可有之与、再心御吟味ヲ被候得共、前条之外差感し候義、更ニ無御座段申上候処、右様他村之寄合ニ雷同致し、自村ニ而寄合談示之義相企候処方事起り、終ニ私憤ヲ以て良民ヲ害し、大典ヲ犯し候ニ立至候段、不届至極之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申二月廿七日

田原小四郎

断獄御役所

控

備前国津高郡田地子村百姓東常五郎口書

岡山県

先般、同郡中田村新御百姓へ対し乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

備前国津高郡田地子村百姓

東 常五郎申口

申四十八才

私義高三石四斗所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処当正月十九日、用向御座候而外方へ参リ、道路之風聞ニ、津高郡加茂郷村之者、新御百姓征伐与称へ、多人数下加茂村大仙河原へ集合罷在候由承リ、同夕帰宅仕候処、留守中へ村内御百姓東基九郎罷出、今夕村方ニ一統氏宮へ寄合候様相咄候旨、帰宅之上妻より承り候ニ付、即刻所持之小銃相携、脇刺ヲ帶し氏宮へ罷越候処、最早村方之者共多人数集罷在候中、村内里正役行森建一郎方一同ハ酒差贈、孰も給合候上私發言、同郡中田村新御百姓共、古御百姓同様之振舞ニ及ひ、無礼筋多キ者も有之ニ付、同村へ押懸參、降參為致候而ハ如何与申談候処、村内御百姓田原小四郎初メ孰も同意、同郡富沢村江押懸ケ、其節村内御百姓大頭鉄五郎、私等先立、不同意之者ハ居宅焼払候様申成し候得者、孰れも立出、同村ニおるて村役人と見受候者指留候得共、聞入不申、直ニ同郡市場村へ罷越候節、何れの婦人敷西三人通行罷在候ヲ、新御百姓之婦女与心得、誰と共難寛、私諸共砲発仕候得共、空砲之義ニ付傍不申、夫々同郡中田村之内字高砂与申所へ、近郷拾六・七ヶ村之者共集合中、翌廿日朝、同村新御百姓共山中へ散乱致候由ニ而、孰れも立別れ、私義者新御百姓之家立へ罷越、右鉄

五郎義も同様參候処、間もなく燃上り候ニ付、若哉鉄五郎所業ニも可有之様相心得罷在候得共、多人數群集之事ニ付、耽与見留不申、外ニ今巷ヶ所も同様燃上り候義ニ御座候、然ル処御出張御役員鈴木陽次様も一同へ、引取候様御理解御座候ニ付、帰村罷在候処、同日八ツ時頃、近郷村とより尚又騒立候ニ付、私井村方之者共、同様前書中田村へ再び押行、私義同村新御百姓繁森八十次宅へ罷越候処、誰歟同人ヲ括り罷在候を、同村御百姓藤井久藏義指留申候ニ付、同人へ対し私義荒と敷相掛合、所持之小銃筒先向ヶ候処、逃去候ニ付、後々空砲相発し、夫々同御百姓黒田寿吉宅へ立越へ、同家鑪子・飯櫃等打毀テ、其場立去り罷在候処、同家も尚又燃上り候得共、孰之者放火仕候哉、混乱中之義相弁へ不申候、然ル処、御出張御役員森瀬喜次様より、一同之者早と引取候様、厚ク御説諭御座候得共、私井前書鉄五郎等先立、新御百姓共従前之通譲リ、無礼筋無之旨證書請取度段、強情申立置、一同共ニ引取候義ニ御座候

右之通申上候(三)付、被仰聞候へ、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者共集合罷在趣相聞へ、於自村も寄合相企候節、吃与取鎮メ可申等無其義、小銃携へ右寄合之場へ立越、新百姓之居村へ押行、降參可為致旨發言致し、村内百姓大頭鉄五郎共同人先立、他村之者ヲ劫誘致し、新百姓居村へ押懸候処、終ニ放火乱暴および候者も有之候ニ付、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚又再發之節も罷越、新百姓之居宅へ踏込、諸道具打毀テ、加之、空砲与ハ雖モ、人民へ対し度々發砲致し候其方故、其他暴動致し、又

且掃毛仕、脇刺ヲ帶し、威之ため所持之小銃携へ、一同之者へ加り、同郡富沢村迄押懸候節、村内御百姓東常五郎、私等先立、不同意之者者居宅焼払候等申威候得共、孰も立出、夫々同郡市場村郷中ニ而、婦人兩三人通行致し罷在候ヲ、新御百姓之婦女与見請、誰と共難覚、私諸共砲發致し候得共、空砲之義ニ付傷不申、夫より同郡中田村之内字高砂与申所へ相集リ、同村新御百姓隨不申、若手向ひ致候節ハ打合可申旨、村と之者共申立、翌廿日五ツ時頃、孰れも立別れ、私義者新御百姓之家立有之山手之方へ參り、同村繁森八十次方本家西妻ニ積重ね有之藁ニ、私所持之火繩ニ而火ヲ移し置、其場退キ罷在候処、無間も燃上り、外ニ巷ヶ所誰與放火いたし、本家九軒井門・土蔵・納屋共八ヶ所焼失仕候、然ル処御出張御役員鈴木陽次様も、早と引取可申様御説諭御座候ニ付、孰れも引取申候処、尚又同日八ツ時頃、近郷村と騒立、村方も同様再び中田村へ押懸候ニ付、私義も俱と罷越候を、同村御百姓藤井久藏義差止メ候ニ付、同人へ対し敷敷相懸合、其頃多人數之内誰與同村新御百姓居宅乱暴又者放火致し、本家拾四軒并納屋・牛屋共拾老ヶ所焼失仕候得共、私義其節手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員森瀬喜次様も厚ク御説諭、孰も早と引取候様被仰候節、新御百姓共、従前之通身分譲リ無礼筋無之旨證書請取度等、私井前書常五郎等先立、強情申立置、引取候義ニ御座候

右之通申上候付、被仰聞候へ、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者とも集合罷在候趣相聞へ、於自村も寄合相企、中田村へ押懸參候ヲ承

者俱と手ヲ着放火及候義ニ可有之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外差感候義、更ニ無御座段申上候処、右様良民ヲ虐ケ、大典ヲ犯し候始末、不届至極之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申二月廿七日

東 常五郎

断獄御役所

控

備前国津高郡田地子村百姓大頭鉄五郎口書

岡山県

備前国津高郡田地子村百姓富次郎伴

大頭鉄五郎申口

申四十二才

先般同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私父富次郎義、高式石所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処、当正月十九日晚、津高郡加茂郷村と之者共、新御百姓征伐与称へ、多人數之者押懸可參哉も難計風聞御座候旨、同郡桜村里正役谷武四郎義、私宅へ立寄相咄候を承り、尚又私義同夕外方方帰懸於途中、村方一統氏宮へ集会、同郡中田村新御百姓共、近來不遜之義儘有之ニ付、是を押懸參候旨、村内御百姓藤本卯太治より承り、最早村方之者共押出罷在候ニ付、一

候節、吃取鎮メ可申等無其義、小銃携へ多人數ニ相加り、村内百姓東常五郎共同人先立、他村之者ヲ劫誘致し、又者空砲与雖モ人民へ対し發砲致し、新百姓居村へ押懸候上ハ、同繁森八十次居宅へ放火致し候ニ付、上下之役人出張説諭ニ因而一旦引取、尚又再發之節も罷越し、多人數之内乱暴放火致し候ニ立至候其方故、其他暴動致候義ニ可有之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外差感候義更ニ無御座段申上候処、右様私憤ヲ以て人民ニ發砲致し、又ハ放火及候始末不段届至極之旨、御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申二月廿七日

大頭鉄五郎

断獄御役所

大頭鉄五郎申口

申四十二才

今般相牢之者共破牢相企候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候私義、当申年正月廿日、津高郡建部郷村と之者共動揺仕、同郡中田村へ押行候節、同村新御百姓居宅へ手ヲ着放火仕候事件ニ付、御捕押へ、惣牢志番江入牢被仰付罷在候中、同六月廿日頃、相牢之内備中賀陽郡板倉村御百姓守屋喜右衛門、大坂信濃橋通り信濃町紀伊国屋平三郎、河内国出生豊松等先立、破牢之義私等初メ相牢一同へ申談候処、孰も同意之趣に候得共、津高郡河内村之内山条御百姓吉村新三之心底懸念仕候ニ付、同月廿三日、右喜右衛門・私等も新三江対し、破牢

之義如何相考候哉与申聞候処、一同之義ニ候ハ、同意可致旨申答罷在、同日晩七ツ時頃、御番人御廻之節、右新ニ破牢之企有之旨申上候処、直ニ同人義外牢へ御入替之上、御取札相成候(一)付、前条企之義其儘相止申候、尚又同月廿七日頃、前番豊松築意ニ而、平三郎・喜右衛門、甲州巨摩郡台ヶ原駅出生岩吉等、再び破牢之義一同へ内談仕候処、相牢孰も同意仕、平三郎義年内板ヲ穿テ、釘ヲ取出し、石ニ而打平ケ又者研付、刃物之様仕立、同七月三日頃御番人透を見令、右四人之者共先立、角木を弛マセ候為め、膝隠し横打板之釘四ヶ所迄穿テ取、尤私義者手ヲ着不申候、然ル処、同五日晚七ツ時過、御番人御廻之節、相牢津高郡西原村御百姓長尾千七、破牢之企有之旨申上候処、直ニ千七義外牢へ御入替、夫と御取札し、相牢之者共も御吟味之上嚴敷御察當御座候ニ付、前条破牢之企成就不仕義ニ御座候

右之通申上候ニ付、被仰聞候ハ、先度悪業相働候(二)付、入牢罷在候上ハ、屹与相慎可居申答無其義、相牢之者之談ニ同意、俱と破牢相企候旨申立候得共、全其方取工、候ニ可有之、不可包申出旨受御吟味候得共、前条之外差感し候義更ニ無御座段申上候所、右様豊松其外之者共江同意致し、破牢相企候始末不届之旨御吟味ヲ受、申被無御座奉恐入候
右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申七月十九日

大頭鉄五郎

断獄御役所

控

備前国津高郡市場村百姓竹内俊三口書

岡山県

備前国津高郡市場村百姓

竹内 俊三申口

申三十二才

先般同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私義高巻石六斗所持仕、農業之餘暇竹籠細工、又者日雇働等仕、渡世相宮罷在候、然ル処当正月一九日夕四半時頃、近郷村へ騒立、多勢押懸参り、津高郡中田村新御百姓共、近来不孫之義儘有之ニ付、征伐いたし候間、不同意之者ハ絶交致候様申、既ニ戸外ハ大声ヲ発し候者御座候ニ付、私義直ニ竹槍携へ、村方之者共俱と罷出、翌廿日朝迄中田村郷中へ村と之者共集合中、同朝五ツ時頃、誰と与義難寛、多勢之者同村新御百姓居宅へ火ヲ放候様、口と申立候ニ付、私義不図受随ひ、同郡西原村御百姓穂太郎俣長尾五郎持参之火繩ヲ取持、夫ハ中田村御百姓堀田松三郎宅ニ而附木取出し、同村新御百姓繁森房吉方納屋南妻ニ重ね有之柴木へ放火仕候処、直ニ燃上り、外ニ誰歎山裾も一時ニ放火致し、本家九軒并門・土蔵・納屋共八ヶ所焼失仕候ニ付、恐敷相成、西原村迄退キ罷在候処、御出張御役員鈴木陽次様より、夫と引取候様一

備前国津高郡西原村百姓長尾千七口書

岡山県

備前国津高郡西原村百姓

長尾 千七申口

申三十二才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私義、高武石七斗所持仕、農業専ニ御座候、然ル処当正月十九日夕、近郷村と御百姓共、津高郡中田村新御百姓共近来不孫之義儘有之ニ付、征伐与称へ動揺仕、既ニ村方へ多人数押来候ニ付、私義竹槍携へ俱と中田村へ罷越、翌廿日朝、同村新御百姓黒田寿吉方へ立入、同家立具・瓶等打毀申候、其外多人数之内誰歎放火致候者も御座候得共、私義者手ヲ着不申、然ル処、御出張御役員鈴木陽次様より、早と村方へ引取候様御理解ニ而一同引取申候、尚又同日八ツ時頃、近郷村と之者、再び騒立押来候ニ付、私儀も俱と前書中田村へ押行、同村土手筋ニ而、糞焚居申場所へ罷越候処、村内御百姓治太郎俣長尾安太郎初メ多人数之者、新御百姓居宅へ放火致し候様、誰と共難寛口と申立候ニ付、私義糞火竹槍ニ懸ケ、同村新御百姓川上伊勢吉居宅裏庇へ投付置候処、間もなく燃上り、折節風強ク、本家拾四軒并土蔵・納屋・牛屋共拾壹ヶ所焼失致し申候、然ル処御出張御役員鈴木陽次様より、早と引取候様、一

控

同へ御理解ニ付、孰も引取申候、然ル処同日八ツ時頃、尚又村と騒立、多人数押懸参候ニ付、私義も相加り、俱と前書中田村へ罷越、同村新御百姓黒田定次郎方東妻ニ重ね有之薪等押崩し、其辺土中ニ埋隠し有之衣類之四枚も掘出し候処、多勢之者手とニ取散し、其末如何相成候哉更ニ存不申候、且同人分家新御百姓黒田寿吉居宅へ燃上り、卒ニ本家拾四軒并土蔵・納屋・牛屋共拾壹ヶ所延焼仕候得共、誰と所業とも承知不仕候、然ル所、御出張御役員鈴木陽次様より、早と引取可申候様、一同之者へ厚ク御説得相成候ニ付、孰も引取申候義ニ御座候

右之通申上候付、被仰聞候者、新百姓征伐与称へ、近村之者共自村へ押来劫誘致し候共、屹鎮り可罷在管無其義、竹槍携へ俱と中田村へ罷越、同村新御百姓繁森房吉納屋江放火及ひ候ニ寄、上下之役人出張説諭に因而一旦引取、尚又再差之節も罷越、頻ニ乱暴致し候其方故、其他暴動およひ候義可有之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外差感候義更ニ無御座段申上候処、右様私憤ヲ以て民家及放火、又者乱暴相働候始末、不届至極之旨御吟味ヲ受、申被無御座奉恐入候

右之通、相違不申上候、已上
明治五年壬申二月廿七日

竹内 俊三

断獄御役所

同之者(厚ク御説諭御座候(二)付、孰れも村方へ引取候義
ニ御座候

右之通申上候付、被仰聞候者、新百姓征伐与唱へ、近村之者とも
自村へ押来候共、屹鎮リ可罷在管無其義、竹槍携へ俱と中田村へ
罷越、同村人家へ立入候上、乱暴相働候二寄、上下之役人出張、
説諭二因而一旦引取、尚又再發之節も罷越、同村新百姓川上伊勢
吉居宅へ放火致し候其方故、其他暴動及候義可有之与、再応御吟
ヲ被候得共、前条之外差威候義更ニ無御座段申上候処、右様私憤
ヲ以て民家ニ立入、類と乱暴又者放火及び候始末、不届至極之旨
御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候
右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申二月廿七日

長尾 千七

断獄御役所

右
長尾 千七甲口

今般、相半之内破牢之企有之旨、御訴申上候(二)付、始末有本
申上候様御吟味ニ御座候

私義、当壬申正月廿日、津高郡建部郷村之者とも動揺仕、
同郡中田村へ押行候節、同村新御百姓居宅へ手を着、放火仕
候事件ニ付、同二月中御捕押、惣年式番へ入牢被仰付、其後
同老番江御入替相成罷在候中、当六月廿七日頃、相半ニ罷
在候河内出生豊松発意ニ而、備中實陽郡板倉村百姓守屋喜右
衛門、大坂信濃橋通り信濃町紀伊国屋平三郎、甲州巨摩郡台

備前国津高郡桜村百姓佐藤作吉口書

岡山 県

備前国津高郡桜村百姓

佐藤 作吉申口

申四十四才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様
御吟味ニ御座候

私義高老石八斗所持仕、農業専ニ御座候、然ル処当正月十九日
夕四ツ時頃、近郷村とも騒立、竹且吹立、砲発等仕、津高郡
中田村新御百姓共、近來不遜之義儘有之ニ付、征伐与称へ、
多人數之者押懸候ニ付、私村方ニも同様騒立、中田村へ罷越
候得共、其節私義者随行不仕候処、翌廿日昼、右多人數之
者、一旦引取、尚又同日八ツ時頃、再び相騒キ押懸候ニ付、
私義竹槍携へ、多人數ニ交リ罷越候処、同村新御百姓共、家
ヲ離れ散乱致し候ニ付、其居所俱と相搜し罷在候中、同御百
姓繁森八十次義、老母病中介抱ニ居残り罷在候ニ付、辺ニ有
之藁繩ニ而括り候処、同村御百姓藤井久藏其場へ立越差留候
ニ付、新御百姓同復ニ可有之与、同人之手ヲ捕へ、荒と數掛
合候上、既ニ打擲致し懸候処、逃去へく様致し候ニ付、手
ニ而三・四ツ打擲仕、巷間計も引摺、夫々立別れ申候処、無
程新御百姓居宅へ、多人數之内誰歎放火致し、燃上り申候得
共、私義ハ手ヲ着不申、然ル処御出張御役員森瀬喜次様々、早
く引取候様厚ク御説諭御座候ニ付、何れも引取候義ニ御座候

ケ原駅出生岩吉等先立、相半一同之者へ破牢之義申談候処、
孰れも同意之趣ニ御座候得共、於私ハ毛頭其志し無御座、乍
去老人立不同意申上候而者身命ニも相抱リ可申勢ひ、不得止
義ニ付、詐而同意之体ニ仕成し置候処、同廿八日右平三郎
義、牢内板を密ニ穿テ、釘取出し、小石ヲ以テ打平ケ、又
者磨付、刃物之様仕立、当七月三日頃、御番人透ヲ見合、
右四人之者共先立、角木ヲ弛ませ候ため、膝隠し横打板之釘
四ヶ所迄も穿テ取罷在候ニ付、早速ニも御訴申上度相考候得
共、輕拳ニ申上候而者私身上如何取計候程も難計、彼是心痛
遷延罷在候処、同五日晚七ツ時過、御役人御見廻り相成候ニ
付、前条破牢之企有之旨不取敢申上候処、直ニ外牢へ御入替
ニ相成、御吟味御座候ニ付、手続申上候処、早速御牢内右損
し所等御取調へ、又者前書刃物様之品不殘御取揚、右之者共
敷數御察当御座候ニ付、破牢之企成就不仕義ニ御座候

右之通申上候ニ付、被仰聞候者、斯ル所業有之故、訴出候与雖
モ、其方おもても真以同意致し置、反像之者ニ可有之、不包申出
候様御吟味ヲ受候得共、右申上候通、決而同意仕候義無御座候
右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申七月十二日

長尾 千七

断獄御役所

控

右之通申上候付、被仰聞候者、新百姓征伐与称へ、近郷之者共中
田村へ押懸參、一同引取、尚又同様多人數之者、同村へ押懸參候
節、竹槍携へ俱と罷越、同村新百姓繁森八十次ヲ縛し候而已なら
ず、同百姓藤井久藏を打擲致し候其方故、其他乱暴相働候義可有
之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外差威候義、更ニ無御座段
申上候処、右様多人數ニ随行、中田村之者共へ対し、暴動相働候
始末、不届之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候
右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申二月廿七日

佐藤 作吉

断獄御役所

控

備前国津高郡西原村百姓長尾長五郎口書

岡山 県

備前国津高郡西原村百姓植太郎伴

長尾長五郎申口

申二十四才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し乱暴仕候始末、有体申上候様御
吟味ニ御座候

私義高四石六斗所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処当正月十
九日、津高郡中田村新御百姓共、近來不遜之義儘有之ニ付、
征伐与称へ、近郷村之者騒立、押来候ニ付、私義同夕四ツ

明治五年壬申二月廿七日
断獄御役所

長尾長五郎

時頃、威之ため小銃携へ罷出、翌廿日朝、村内字西川堤へ前書中田村境二付、同所へ村々之者集會致候節、多人數之者私共、中田村新御百姓居宅へ火ヲ放チ候様、口々呼ハリ居候所、同郡市場村御百姓竹内俊三義、私持參罷在候火繩引取持駈出、中田村新御百姓繁森房吉方納屋南妻ニ重ね有之柴木江放火致し、燃上リ候を見及申候、然ル処、御出張御役員鈴木陽次様御理解御座候二付、村々一同私とも引取申候処、尚又同日八ツ時過、近郷村々之者騒立押来、私義も俱々中田村へ罷越、同村新御百姓黒田定次郎宅へ、多人數俱々參、私義建具等打毀チ乱暴仕候、然ル処御出張御役員森瀬喜次様、種々御理解、孰も引取候様被仰聞候二付、一同村々江引取申候義ニ御座候

控

備前国津高郡西原村百姓長尾安太郎口書

岡山県

備前国津高郡西原村百姓治太郎碎

長尾安太郎申口

申三十二才

先般、同郡中田村新御百姓江対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

右之通申上候付、被仰聞候者、新百姓征伐与称へ、近郷村々騒立候共、止り可申皆無其義、小銃携立出候上、多人數へ交り、一同津高郡中田村新御百姓居宅へ押懸ケ候節罷越、火ヲ放チ候様口々相叫候処々、同郡市場村百姓竹内俊三義、其方持參罷在候火繩持行、放火おひ候二付、上下之役人出張、説諭ニ因而一同引取、尚又再発之節も罷越、新百姓之居宅、俱々乱暴相働候其方二付、手ヲ着放火致し候義有之与、再応御吟味ヲ被得共、前条之外差威候義、更ニ無御座段申上候処、右様近郷之動揺ニ與し、私憤ヲ以て新百姓居宅乱暴致し、多人數俱々火ヲ放チ候様不容易義申立、勢を捕候処々、終ニ放火致し候ニ立至リ候始末、不届之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

私義、高式石老斗九升老合所持仕、農業専ニ御座候、然ル処、当正月十九日夕、津高郡中田村新御百姓共、近来不遜之義儘有之ニ付、征伐与称へ、近郷之者共騒立押来候(三)付、村方之者共も同様ニ而、同夕四ツ時頃、私義驚口携罷出、翌廿日中田村新御百姓黒田定次郎方へ參り、同家箆箆口ニ懸ケ、老間計引除ケ、又者門戸等押外し候等乱暴仕候、然ル処御出張御役員鈴木陽次様、一同之者へ御説諭御座候二付引取申候処、尚又同日八ツ時過、近郷村々之者押来、村内之者共并私義も俱々中田村へ罷越、同村端堤へ多人數集會致し居候場所へ罷出、新御百姓居宅へ火ヲ放チ可申等、多勢之者私義も口々申居候折柄、村内御百姓長尾十七義、菓二火ヲ移し、

備前国津高郡田地子村百姓

大江 梅吉申口

申四十七才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

竹槍之先へ附、前書中田村新御百姓川上伊勢松宅舎裏庇へ投付候処、間もなく燃上り、本家十四軒并土蔵・納屋・牛屋共拾一ヶ所延焼致し候、然ル処御役員森瀬喜次様御出張、一同之者へ早々引取候様、厚ク御理解御座候付、孰れも引取候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候者、新百姓征伐与称へ、村々騒立候共、止り可申皆無其義、多人數へ交り、一同津高郡中田村新御百姓居宅へ押懸候節罷越、俱々乱暴相働候二付、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚又再発之節も罷越、新百姓之居宅へ火ヲ放候様、口々相叫候処々、村内御百姓長尾十七義放火及候ニ立至候其方二付、手を着俱々放火致候義有之与、再応御吟味ヲ被得共、前条之外差威候義更ニ無御座段申上候処、右様近郷之動揺に與し、私憤ヲ以て新百姓居宅乱暴致し、多人數俱々火ヲ放チ候様不容易義申立、勢ヲ捕候処々、終ニ放火致し候ニ立致候始末、不届之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

明治五年壬申二月廿七日

長尾安太郎

断獄御役所

備前国津高郡田地子村百姓大江梅吉口書

岡山県

同村立出候得共、五拾丁程二付、曉八ツ時頃罷歸候処、豈囃んや村方一同之ものとも、新御百姓所在之中田村へ相越、里正建一郎も出張之趣承候二付、直ニ跡慕ひ參、同村之内字光本二而右始末建一郎へ申述置、其儘同所ニ而村方之者へ相加里罷在候処、翌廿日朝、多人數之内新御百姓之居宅乱暴・放

火致し候者も有之候得共、私義ハ手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員鈴木陽次様、一同ヘ早引取候様御説諭ニ相成候
(二)付、同日昼九ツ時頃、村方一同之者共引取、尚又同日八ツ時頃、近郷村ト騒立、前書新御百姓之居宅乱暴・放火および候得共、私義ハ前夜之疲ニ而相臥セリ、其節ハ罷出不申義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候者、新百姓征伐与称ヘ、加茂郷之者共寄合之趣、自村心得之ため探索罷越候処、最早引取り鎮り罷在候ニ付、罷帰リ、右見聞之次第村役人ヘ申述候上者、中田村ヘ集合之者ヘも右申聞、早引取可申答無其義、直ニ一同ヘ相加リ、外多人數おゐてハ新百姓之居宅乱暴・放火及候ニ付、其節先立候者見覺又ハ姓名等伝ヘ聞、且俱手ヲ着暴動致し候義可有之与、再心御吟味ヲ被候得共、前条之外差感し候義、更ニ無御座段申上候処、右様乱暴・放火之場ヘ罷越、多人數ニ相加リ候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

右之通、相違不申上候、已上
明治五年壬申五月廿七日

大江 梅吉

断獄御役所

控

備前国津高郡田地子村百姓行森貞一口書

岡山県

備前国津高郡田地子村百姓

行森 貞一口

申二十九才

先般、同郡中田村新御百姓江対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私義、高石所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処当正月十九日朝四ツ時頃、用向有之、村内里正役行森建一郎江参候処、村内御百姓大江梅吉参合罷在、前書建一郎申出候ハ、津高郡加茂郷村ト之者共、新御百姓征伐与唱ヘ、同郡下加茂村之内字大仙河原ヘ、多人數相集り罷在候風聞ニ付、前書梅吉同道、探索ニ参候様申ニ付、直ニ同入同道、下加茂村ヘ罷越し、右集合之人数見及ひ候得共、進退如何共不相分、梅吉義者同所ヘ居残り、私義者同日八ツ時頃帰村、前書之趣建一郎ヘ申述置、私宅ヘ罷帰リ居候処、尚又建一郎方使ひ差越、兎角不隠様子、且梅吉義も罷帰リ居候間、同入同道今一応探索ニ参候度申越候(二)付、同夕五ツ時過村方立出、尚又下加茂村江参り承合候処、集合多人數之者、最早先居村ヘ引取候由ニ承り、同夕八ツ時頃、生村ヘ罷帰リ候処、最早村方之者共一同、同郡中田村ヘ罷越、前書建一郎も同所ヘ出張罷在候由ニ付、直ニ跡慕ひ参、同村之内字光本ニ而、右探索之趣、梅吉方建一郎ヘ申述、私義ハ村ト人数ニ交リ罷在候処、翌廿日朝、多人數之中、新御百姓居宅乱暴・放火仕候者有之、私義ハ手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員鈴木陽次様、一同ヘ御説諭相成候付、同屋四ツ時頃、村ト之者共一同

備前国津高郡田地子村百姓

東 甚九郎申口

申二十九才

先般、同郡中田村新御百姓江対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

共ニ引取休息中、同日八ツ時頃、尚又近郷村ト騒立候付、私義も村方之者俱前書中田村ヘ罷越候処、多人數之中、乱暴・放火等仕候者も有之候得共、私義前同様手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員森瀬喜次様方一同之者ヘ、早引取候様厚ク御説得ニ相成候付、同晚七ツ時頃、一同共引取申候義ニ御座候
右之通申上候付被仰聞候ハ、新百姓征伐与称ヘ、加茂郷之者共寄合候趣、自村心得之ため探索罷越候処、最早引取り鎮り罷在候ニ付、罷帰リ、右見聞之次第、村役人ヘ申述候上ハ、中田村ヘ集合之者ヘも右申聞、早引取可申答無其義、直ニ一同ヘ相加リ、外多人數おゐてハ新百姓之居宅乱暴・放火及候付、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚又再発、乱暴・放火および候場ヘ罷越候其方故、其節先立候者見覺、又ハ姓名等伝聞、且俱手ヲ着暴動致し候義可有之与、再心御吟味ヲ被候得共、前条之外差感し候義更ニ無御座段申上候処、右様乱暴・放火之場ヘ附隨罷越候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

明治五年壬申五月廿七日

行森 貞一

断獄御役所

控

備前国津高郡田地子村百姓東甚九郎口書

岡山県

私義、高石所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処当正月十九日屋八ツ時頃、用向有之、村方里正役行森建一郎方ヘ罷出候処、同人申出候ハ、少々談度義有之候間、村方惣代之者ニ三名呼ニ参候様申候ニ付、尤其節村内御百姓齋藤勝次郎亡娘かよ方家普請中ニ而、村方之者三十人計も為手伝参合セ候ニ付、同家ヘ罷越、居合セ候者共ヘ対し、前書建一郎申付之趣申述置、私宅ヘ罷帰申候、同夕六ツ時頃、誰ト与申義難聞留、村内一同氏神ヘ唯今相集り候様、居宅外方殿敷申ニ付、直ニ立出、村内御百姓東常五郎宅ヘ参り、様子相尋候処、同人義者他行中之旨同人妻方申答、其節子細相尋候ニ付、前書誰歟氏宮寄合之義伝來候次第、且加茂郷村ト之者多人數、下加茂村之内字大仙河原ヘ、新御百姓征伐与称ヘ集合罷在候旨、風聞承候儘相咄置、急キ氏宮ヘ罷出候処、最早村方之者多人數相集り罷在、尤前書建一郎方差送り候酒、俱給合罷在候中、一同之者、同郡中田村新御百姓共不孫之所業不少ニ付、征伐ニ罷越候様口ト申、何れも押出候(三)付、私義何心なく勢ニ乗し、一同之者共ニ中田村ヘ罷越し、翌廿日、多人數之者及乱暴候得共、私義者聊も交り不申候、然ル処同朝、御出張御役員鈴木陽次様御説諭御座候(三)付、同屋九

ツ時頃一同村方へ引取、尚又同日八ツ時頃、近郷村と再び
 動揺任、私村方之者共も、前書中田村之内へ罷越し、多人數
 之者乱暴・放火等致し候得共、私義者手ヲ着不申候、然ル
 処、御出張御役員森頼喜次様々、村と一同之者へ、早と引取
 候様厚ク御説得御座候ニ付、同晩六ツ時頃村方へ引取申候ニ
 御座候

右之通申上候付、被仰聞候ハ、新百姓征伐与唱へ、加茂郷之者共
 寄合罷在候趣相聞候共、村方おるてハ取鎮リ可罷在寄無其義、村
 方談合之場ニ立越へ、夫も多勢ニ附随ひ、津高郡中田村へ押行、
 外多人數之中、新百姓之居宅乱暴・放火及ひ候者有之、上下之役
 人出張、説諭に因而一旦引取、再騒立候節も罷越候其方ニ付、俱
 と手ヲ着暴動致し候義可有之与再応御吟味ヲ被候得共、前条之外
 差蔵し候義、更ニ無御座段申上候処、右様乱暴之場へ再度迄附隨
 罷越候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申被無御座奉恐入候

明治五年壬申五月廿七日

東 甚九郎

断獄御役所

備前国津高郡田地子村百姓行森熊言口書

岡山 県

備前国津高郡田地子村百姓

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様
 御吟味ニ御座候

私義、高式石七斗所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処当正月
 十九日、村内御百姓齋藤勝次郎亡娘かよ方家普請ニ付、村方
 之者共三十人計手伝ニ参リ、私義も其中ニ相加リ罷在候処、
 村内里正役行森建一郎々、村方惣代与して同三人参員候様、
 村内御百姓東甚九郎ヲ以申越候ニ付、私并村内御百姓田原小
 四郎・大頭源吉共、惣代与して罷出候処、建一郎申出候ハ、
 津高郡下加茂村之内字大仙河原江、新御百姓征伐与称へ、加茂
 郷村と之者共、多勢徒党罷在候風聞有之ニ付、右多人數之者
 自然押懸、村内通行之節、若路留候も難計、右様相成候而ハ、
 村方入費も不少、如何致候方可然哉、尤為探索、過刻方村内
 御百姓大江梅吉・行森貞一等遣し置候ニ付、或ハ村内字花折
 へ、前以村方之者罷出、通行押留メ可申哉与申候ニ付、前書
 小四郎先立申出候ハ、自然右様之義有之候共、小村之事故、
 差止メ候義不相叶節ハ、一同ニ附添可参与申答候処、決而先
 立候事ハ不相成旨申渡候ニ付、直ニ同家立出、前書かよ方普
 請場へ罷越し、一統之者へ右之趣小四郎申聞置、其儘同家
 二而手伝仕、同晩掃宅罷在候処、村内之者多人數私居宅前通
 行、氏官へ一同相集リ候様承リ候ニ付、及見候処、何れも竹
 鎗所持罷在候ニ付、私義も即刻同所へ罷越候処、前書建一
 郎より酒差送り候由ニ而、一同之者給合罷在、私義も同様給

合候中、村内御百姓東常五郎初々、前書小四郎等先立申出候
 ハ、同郡中田村新御百姓共、近来不遜之義儘有之ニ付、征伐
 ニ参候様申ニ付、多人數之勢ニ乘し、一同俱と押出し、中田
 村之内字高砂へ集合、翌廿日多人數之者乱暴・放火等仕候得
 共、私義ハ手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員鈴木陽次様
 より、御説諭御座候ニ付、同日九ツ時頃一同引取申候処、尚
 又同日八ツ時頃々、近郷村と騒立候(二)付、一同俱と前書
 中田村へ罷越し、多人數之中乱暴・放火等仕候者御座候得
 共、私義ハ前同様手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員森頼
 喜次様々、一同之者へ早と引取候様厚ク御説得御座候ニ付、
 同晩七ツ時頃、一同共ニ引取候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候者、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者共寄
 合候趣承候得者、屹心得振も可有之寄無其義、村方之者共寄合候
 場へ罷越、多人數之者、津高郡中田村へ押懸、新百姓之居宅乱暴
 ・放火および候ニ付、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚
 又村と再発暴動及候節も罷越候其方故、先立候者見覚へ、或ハ姓
 名等伝聞キ、且俱と手ヲ着乱暴・放火致し候義可有之与、再応御
 吟味ヲ被候得共、前条之外差蔵し候義更ニ無御座段申上候処、右
 様乱暴之場へ再度迄附隨罷越候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申被
 無御座奉恐入候

右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申五月廿七日

行森 熊言

断獄御役所

控

備前国津高郡田地子村百姓大頭源吉口書

岡山 県

備前国津高郡田地子村百姓

大頭 源吉申口

申三十四才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様
 御吟味ニ御座候

私義、高三石所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処当正月十九
 日、村内御百姓齋藤勝次郎亡娘かよ方家普請ニ付、村方之者
 共三十人計手伝ニ参リ、私義も其中ニ相加リ罷在候処、村内
 里正役行森建一郎々、村方惣代与して同三人参員候様、村内
 御百姓東甚九郎ヲ以て申越候ニ付、私并村内御百姓田原小四
 郎・行森熊吉共、惣代与して罷出候処、建一郎申出候ハ、津
 高郡下加茂村之内字大仙河原へ、新御百姓征伐与称へ、加茂
 郷村と之者共、多勢徒党罷在候風聞有之ニ付、右多人數之者
 自然押懸、村内通行之節、若路留候も難計、右様相成候而ハ、
 村方入費も不少、如何致方可然哉、尤為探索、過刻方村内御
 百姓大江梅吉・行森貞一等遣し置候ニ付、或ハ村内字花折
 江、前以村方之者罷出、通行押留可申哉与申候ニ付、前書小
 四郎先立申出候ハ、自然右様之義有之候共、小村之事故、差
 止メ候義不相叶節ハ、一同共ニ付添可参与申答候処、建一郎

々、決而先立候事ハ不相成旨申渡候ニ付、直ニ同家立出、前書かよ方普請場へ罷越し、一統之者へ、右之趣小四郎方申聞置、其儘同家ニ而手任仕、同晩私宅江罷帰リ、打臥罷在候処、隣家御百姓大頭富吉申来候へ、私義前書普請場へ罷帰候後、村方之者一同、今夕氏宮へ相集リ候様相成、私義も出懸ケ候様申ニ付、早速同所へ罷出候処、最早多人数相集リ居申、尤其節前書建一郎酒差送り、俱々給合罷在候中、前書小四郎、村内御百姓東常五郎等先立申出候へ、同郡中田村新御百姓共、近來不遜之所業不少ニ付、征伐ニ參候様申ニ付、多人数之勢ニ乘し、一同俱々押出し、中田村之内字高砂へ集合、翌廿日多人数之中、乱暴・放火等仕候者有之候得共、私義者手ヲ着不申候処、御出張御役員鈴木陽次様々、御説諭御座候ニ付、同日九ツ時頃、村方一同引取申候処、尚又同日八ツ時頃、近郷騒立候(二)付、一同俱々前書中田村へ罷越、多人数之者乱暴・放火等仕、私義ハ手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員森瀬喜次様々一同之者へ、早々引取候様厚ク御説得御座候(二)付、同晩七ツ時頃、共々引取候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候へ、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者共寄合罷在候趣ニ付、自村ニも寄合候節、屹心得振可有之筈無其義、右場所へ立越候上、一同津高郡中田村へ押懸ケ、新御百姓宅乱暴・放火および候得共、私義手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員鈴木陽次様々一同之者へ、早々引取候様御説諭御座候ニ付、同日九ツ時頃、村方へ引取罷在候処、同屋八ツ時頃、近郷村へ尚又騒立、村方も同様前書中田村へ、私義も俱ニ罷越、多人数之者乱暴・放火仕候得共、私義者前同様手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員森瀬喜次様々一同之者へ、早々引取候様厚ク御説得ニ相成候ニ付、同夕六ツ時頃、一同共々引取候義ニ御座候

出候様喚立候ニ付、罷越候処、最早多人数寄集罷在、且村方里正役行森建一郎、酒差送り有之、互ニ給合候上、同郡中田村新御百姓共、近來不遜之義儘有之ニ付、征伐ニ罷越候様口々申立、何れも同所押出し候ニ付、私義も跡々附随罷越候途中、同郡富沢村之内字ジね石二而、村内御百姓大頭鉄五郎ニ出逢候(二)付、前書中田村へ參リ懸ケ之由相咄、直ニ同村之内字高砂へ罷越し、翌廿日朝、多人数之者、新御百姓屋宅乱暴・放火および候得共、私義手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員鈴木陽次様々一同之者へ、早々引取候様御説諭御座候ニ付、同日九ツ時頃、村方へ引取罷在候処、同屋八ツ時頃、近郷村へ尚又騒立、村方も同様前書中田村へ、私義も俱ニ罷越、多人数之者乱暴・放火仕候得共、私義者前同様手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員森瀬喜次様々一同之者へ、早々引取候様厚ク御説得ニ相成候ニ付、同夕六ツ時頃、一同共々引取候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候者、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者共寄合罷在候趣相聞へ、自村ニも寄合候節、屹心得振可有之筈無其義、右場所へ立越候上、一同津高郡中田村へ押懸ケ、新御百姓宅乱暴・放火および候(二)付、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚又再発妄動及候節罷越し候其方故、先立候者見覚、或ハ姓名等伝へ聞、且俱々手ヲ着暴動致し候義可有之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外、差感し候義更ニ無御座段申上候処、右様両度共附随、乱暴之場へ罷越候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申被無御座奉恐入候

条之外差感し候義、更ニ無御座段申上候処、右様村方寄合の事起リ、外多人数暴動および候場へ立越候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申被無御座奉恐入候

右之通、相違不申上候、已上
明治五年壬申五月廿七日
大頭 源吉
断獄御役所

控
備前国津高郡田地子村百姓藤本卯太治口書
岡山県

備前国津高郡田地子村百姓
藤本卯太治申口
申三十五才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私義、兼而高式石七斗七升三合所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処当正月十八日朝、村方郷中字笹山へ炭焼ニ參、掃宅仕候処、母方申聞候へ、津高郡加茂郷村と之者共、新御百姓征伐与称へ、同郡下加茂村之内字大仙河原へ、多人数相集リ居申風聞有之由承り、翌十九日、尚又炭焼ニ參リ、前書笹山へ一泊可仕心得ニ罷在候処、同夕六ツ時頃、村方之者共多人数村内氏宮へ相集リ、誰ニ而御座候哉、私ニも早々同所へ罷

右之通、相違不申上候、已上
明治五年壬申五月廿七日
藤本卯太治
断獄御役所

控
備前国津高郡田地子村百姓大頭富吉口書
岡山県

備前国津高郡田地子村百姓
大頭 富吉申口
申二十一才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私義高三石所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処、当正月十九日村内御百姓斎藤勝次郎亡娘かよ方家普請為手伝、村方之者三十人計參、私義も其中ニ加リ罷在候処、同晩於同所、村内御百姓田原小四郎申出候へ、津高郡加茂郷村と之者、新御百姓征伐与称へ、同郡下加茂村之内字大仙河原江、多人数集合罷在候趣故、村内も一同今夕氏宮へ相集リ談し致度段、居合候者共へ対し申出候を承先々一同之者立別れ、私義ハ掃路、村内御百姓大頭源吉・西山久吉等へ、右之趣申伝兵候様、前書小四郎方申付候ニ付、夫々伝置、一旦掃宅仕、同夕六ツ時過、村内氏宮へ罷出候処、最早多人数寄集罷在、且村方里正

明治五年壬申六月十二日

大頭 富吉

断獄御役所

役行森建一郎の差贈り候酒、一同俱と給合罷在候中、誰名前共難覚居合候者共、同郡中田村新御百姓共、近来不遜之所業儘有之ニ付、征伐ニ参候様口と申、一同押出し候（二）付、私義も多人数ニ附随ひ、卒ニ中田村へ罷越し、外村とゞも多人数押懸ケ参、翌廿日朝、多人数之者乱暴・放火等仕候得共、於私者、存外之義ニ付、同村溝之中ニ罷罷在候中、御出張御役員鈴木陽次様、一同之者へ御説諭ニ相成候付、同日九ツ時頃、一同共ニ村方へ引取、休息罷在候処、尚又同八ツ時頃、近郷村と之者騒立候付、私村方之者共、同様前書中田村へ罷越し、多人数之者乱暴・放火仕候得共、私義ハ再度共手ヲ着不申候、然ル処、御出張御役員森頼喜次様ハ一同へ、早と引取候様厚ク御説得ニ相成、同晚六ツ時頃引取候義ニ御座候

備前国津高郡田地子村百姓西山久吉口書

岡山 県

備前国津高郡田地子村百姓

西山 久吉申口 申十五才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候ハ、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者共寄合罷在候趣ヲ以、村内おゐても寄合之義、村内百姓田原小四郎ハ申談候節、屹差留可申答無其義、却而村方之者へ申伝へ、氏宮へ集候処近郷村と騒立、津高郡中田村新百姓居宅へ押懸ケ、外多人数おゐてハ乱暴・放火および候（三）付、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚又再発妄動之節も罷越候上ハ、其節先立候者見寛、或ハ姓名等伝聞キ、且俱と手ヲ着暴動・放火致し候義ニ可有之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外差感候義、更ニ無御座段申上候処、右様村方寄合之義申伝へ、且暴動之場へ立越候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

私義、兼而高五石老斗八升所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処、当正月十九日晚六ツ頃、村内御百姓大頭富吉義、同斎藤勝次郎亡娘かよ方家普請爲手伝参帰掛之由ニ而、私宅へ立寄申出候ハ、津高郡加茂郷村と之者、新御百姓征伐与称へ、同郡下加茂村之内字大仙河原へ、多人数集集致し騒ケ敷候（二）付、村方も一統氏宮へ寄合候間、早と罷出候様申二付、同所へ参候処、最早村方之者多人数寄集罷在、村方里正役行森建一郎ハ、酒差送り有之、一統同様給合之上、同郡中田村新御百姓共、近来不遜之所業儘有之ニ付、征伐ニ参候様一同申出、兼而拵へ有之村職、前書建一郎ハ請取参候様、村内御百姓田原小四郎ハ申付候二付、建一郎宅へ参り請取、氏宮へ罷

控

備前国津高郡田地子村里正役行森建一郎口書

岡山 県

備前国津高郡田地子村里正役

行森建一郎申口 申四十三才

先般、村方并近郷村と之者共、新御百姓江対し、乱暴仕候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

当正月十九日朝、村内御百姓大江梅吉義、私宅へ参申出候ハ、津高郡下加茂村郷中大仙河原江、新御百姓征伐与称へ、加茂郷村と之者共、多勢集合致し罷在候風聞承候旨相咄候（二）付、直ニ同人并村内御百姓行森貞一共探索ニ差遣置、同日村内御百姓齋藤勝次郎亡娘かよ方家普請ニ付、村方之者共多人数手伝ニ参り居候ニ付、右場所敷代与して同三人参候様、村内御百姓東甚九郎ヲ以て申遣候処、村内御百姓田原小四郎・行森熊吉・大頭源吉等罷越候付、右之趣相断、徒党之者共、自然当村ヲ通行致候も難計風聞有之、就而ハ村端へ罷出防キ候様申談候処、小四郎先立申出候ハ、多數人之義、殊ニ此方ハ小村之事故、迎も押留候義も六ツヶ敷、不相叶節ハ、付添可参哉与申二付、決而先立候義ハ不相成旨申聞候処、三人共罷帰リ、無程前書貞一・梅吉共罷帰、始末相尋候処、兎角取留候義相知不申候得共、村方へ自然立入候も難計

掃掛候処、最早一同押出し掛ケ罷在候ニ付、相交リ、前書中田村へ罷越、翌廿日、村と多人数之中、乱暴・放火等仕候者有之候得共、私義ハ手ヲ着不申、然ル処御出張御役員鈴木陽次様ハ、一同之者へ御説諭御座候ニ付、同日九ツ時頃、一統同様引取罷在候処、同屋八ツ時頃、尚又近郷村と騒立、前書中田村へ罷越候ニ付、私并村方之者共俱と罷越し、多人数之中、新御百姓居宅乱暴・放火致候者有之候得共、私義ハ手ヲ着不申、然ル処御出張御役員森頼喜次様ハ、一同之者へ、早と引取候様厚ク御説得御座候ニ付、同夕六ツ時頃、村方一同引取申候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候者、新百姓征伐与へ、加茂郷之者共寄合罷在候趣ニ付、自村ニも寄合可申旨、村内百姓大頭富吉ハ申伝候共、止り可申答無其義、氏神へ集候処ハ、近郷村と騒立、遂ニ津高郡中田村新百姓居宅へ、多人数押懸ケ、乱暴・放火および候ニ立至リ、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚又再発妄動之節も罷越候上者、其節先立候者見寛へ、或ハ姓名等伝聞、且俱と手ヲ着暴動・放火致し候義可有之与、再応御吟味ヲ被り候得共、前条之外差感候義、更ニ無御座段申上候処、右様村方寄合ハ事起リ、外多人数暴動および候場へ立越候始末、不埒之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

明治五年壬申五月廿七日

断獄御役所

西山 久吉

趣風聞之旨申出候付、御具江之御注進書相認罷在候処、村内御百姓行森武四郎、私宅へ参り申出候へ、村方一統最早駈立、氏宮江寄合候趣ニ申、乍併当家江考、先達而郡中田村新御百姓黒田定次郎参候節、既ニ座上へ腰掛候義も有之、村内一同不服ニ相考、当家与絶交ニ而も可致様申居候を承候間、内と為相知候旨申、罷掃リ、且私義近來村方氣請を損じ罷在候ニ付、外村徒党ニ事寄せ、若哉私宅へ押懸ケ、乱暴等致し候程も難計相考候処、酒意斗氏宮寄合之場所へ為持違し、且村方之交与して、仲桑太郎氏宮へ遣し申候、然ル処、追々箭筒竹貝等吹立罷在、兼而私預之村印入職老本貸せ與候様申、村内御百姓西山久吉取ニ参候ニ付、恐縮之餘り相渡し申候、然ル処、同夕五ツ時過、一同同郡富沢村へ押出候(二)付、引留め度所存ニ候得共、迎も多人數之勢不及義与相心得、不得止跡追掛参候処、最早建部郷村へ波及仕、遂ニ十六・七ヶ村之者駈立、中田村野間藁重有之ヲ、多人數之者共放火仕、翌廿日朝、同村新御百姓共居宅へ放火仕、村と役人私共、種々心配仕候得共、大勢之義故取鎮方行届不申候処、御役員鈴木陽次様御出張、村と之者へ種々御理解ニ相成、一先引取、尚又同日八ツ時頃再度駈立、中田村へ押行、新御百姓共之居家打毀、尚又放火仕候ニ付、御役員森瀬喜次様御出張、早と引取候様種々御理解ニ相成、何れも承伏仕、引取申候得共、同日風烈敷、遂ニ本家式拾三軒井門・土蔵・納屋・牛屋共拾九ヶ所焼失仕候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候へ、新百罷征伐与称へ、加茂郷之者共集

合罷在候風聞承上へ、村方人氣屹与取鎮め可申答無其義、却而惣代之者呼寄、前以村端へ罷出防キ方等及示談、卒ニ村内百姓田原小四郎発言、村方之者共氏宮へ寄合、右場所へ贈り物致し候上、孰も酒氣ニ乘し同所押出し、村と劫誘、中田村へ罷越、多人數之内乱暴・放火および候者有之ニ付、上下之役人出張、説諭ニ因而一旦引取、尚又再発之節も村方之者共罷越、前同様多人數之者暴動相働候ニ立至り、其方おゐても隠悪相企候ニ可有之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外差感候義更ニ無御座段申上候処、右様村惣代呼寄、示談ニ及ひ、又ハ集合之場へ無謂酒等差贈り、同所押出候節も指留不申始末、不束之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申二月廿七日

行森建一郎

断獄御役所

備前国津高郡桜村副戸長谷武四郎口書

岡山県

備前国津高郡桜村副戸長

谷 武四郎申口

申五十七才

先般、同郡中田村新御百姓へ対し、村と之者共乱暴仕候節、始末

有体申上候様御吟味ニ御座候

私義里正役在動中、当正月十八日、津高郡加茂郷村と之者共、新御百姓共近來不遜之義儘有之ニ付、征伐与称へ、多人數同郡下加茂村之内字大仙河原へ寄集罷在候旨、道路之風聞承り、翌十九日晚、同郡中田村へ用向有之罷越し、帰路、同郡田地子村御百姓大頭鉄五郎方へ立寄候節、前書多人數之者大仙河原へ集合罷在候旨、風聞之儘相咄し、直ニ帰宅仕候処、倅同姓源造、前刻探案ニ差遣し候者とも罷掃リ、様子承候処、前書之通集合相違無御座、近郷村と人氣不隠趣ニ付、判頭之者共呼寄セ、村内之者共決而駈立不申様説諭仕候得共、外村と多人數之義、遂ニ同夕四ツ時頃、村端迄押出し候ニ付、私義も即刻同所へ罷越し、尚説諭仕候所、暫時相止り罷在、終ニ前書中田村へ押行、外村と之者へ相交り、乱暴・放火および候(三)付、翌廿日、御出張御役員鈴木陽次様より御説諭ニ相成、同日四半時頃、一同村方へ引取罷在候処、近郷村と尚又駈立、村方之者共、同様前書中田村へ罷越候処、御出張御役員森瀬喜次様、何れも早と引取候様厚ク御説得相成候ニ付、同夕六ツ時頃、一同之者共村方へ引取候義ニ御座候、私おゐても種々心配、取鎮候得共、前条之次第ニ立至候段、恐入候義ニ御座候

右之通申上候ニ付、被仰聞候へ、新百姓征伐与称へ、加茂郷之者共多人數集會之趣承候得者、役前之義、屹与処置振も可有之管無其義、津高郡田地子村御百姓大頭鉄五郎宅へ立寄候節、右風聞申聞、且村方之者共駈立、村端迄押出候節、説諭ニ依り一旦相止り

候得者、今一応申論し、鎮定為致へく(候)処、其場等閑之処、

他村之者ニ雷同し、新百姓之居宅へ押懸、多人數之内乱暴・放火致し候者有之上へ、一身之恐れを抱キ、説諭等閑う義ニ可有之与、再応御吟味ヲ被候得共、前条之外差感候義、更ニ無御座段申上候処、右様取鎮メ方不行届之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候

右之通、相違不申上候、已上

明治五年壬申五月廿九日

谷 武四郎

断獄御役所

備前国津高郡田地子村御百姓行森武四郎口書

岡山県

備前国津高郡田地子村御百姓

行森武四郎申口

申三十三才

先般、村内里正行森建一郎江対し、村方不届合之廉申入候始末、有体申上候様御吟味ニ御座候

私義、兼而高壱石三斗所持仕、農業専ラニ御座候、然ル処、

当正月十九日、村内御百姓齋勝次郎亡娘かよ方家普請ニ付、村方之者三拾人計并私義も手伝与して罷越居申中、同日九ツ時頃、用向有之、透ヲ見合、村方里正役行森建一郎方へ罷出候処、同人方申聞候へ、津高郡加茂郷村と之者、新御百姓征

伐与称へ、同郡下加茂村之内字大仙河原へ、多人数集合罷在候旨申出候(二)付、私方申出候へ、過日御当家へ、同郡中田村新御百姓黒田定次郎罷出候節、座上へ腰被為懸候旨、前書普請場二居合セ候もの共、承込罷在候哉、誰共難覚申出候へ、右様旧御百姓同様取扱相成候而へ、更ニ新古之區別無之候間、一統申合、篤与情実礼し候上、相違無之候へ、当家ヲ絶交可致等申立罷在候ヲ承候ニ付、右之趣建一郎へ内々心付ケ申入置、前条用向も相仕廻、夫々右普請場へ罷帰候處、大里正役行森源次郎々、岡山へ飛脚ニ罷越候様申付候ニ付、直ニ居村出足、御県庁へ罷越し、翌廿日夕九ツ時頃帰村仕候ニ付、村方動搖之事件へ關係不仕義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候へ、新百姓征伐与称へ、津高郡加茂郷之者共寄合候趣相聞候ニ寄り、村方人氣立候折柄、村内普請場ニ而承込候次第ヲ以、里正役行森建一郎へ相咄候へ、同人を恐怖為致候而へ、隠悪取巧候ニ可有之与、再応御吟味ヲ破り候得共、前条之外差威候義、更ニ無御座段申上候處、右様村内騒立候際ニ当リ、無謂義申称候段不埒之旨御吟味ヲ受、申披無御座奉恐入候右之通、相違不申上候、已上

明治五年五月廿七日

行森武四郎

断獄御役所

(了)

あらゆる差別をなくすために

人種差別撤廃条約

ナタン・レルナー 著 齊藤恵彦・村上正直 共訳

A5判310頁 定価2,000円

平和と人権擁護を求める気運が国際的に高まっている今日、1965年12月の国連総会で採択された「人種差別撤廃条約」は、人権の国際的保護の法的かつ制度的保障を確かにするものとして、「国際人権規約」とともに多数の国で批准されている。本書はこの条約をわかりやすく解説したもの。

社部落解放研究所 大阪市浪速区久保吉1-6-12
TEL 06-568-1300